

# 桐壺

## 渋谷栄一訳

### 第一章 光る源氏前史の物語

#### 「第一段 父帝と母桐壺更衣の物語」

どの帝の御代のことであつたか、女御や更衣たちが大勢お仕えなさつていたなかに、たいして高貴な身分ではないで、きわだつて御寵愛をあつめていらつしやる方があつた。

最初から自分こそはと氣位い高く持つていらつしやつた御方々は、不愉快な者だと見くだしたり嫉んだりなさる。同じ身分や、その方より身分の低い更衣たちは、いつそうおもしろくない。毎日の宮仕えにつけても、他人の氣持ちばかりを不愉快にさせ、恨みを買うことが積もり積もつたせいであるうか、とても病弱になつてゆき、何となく心細げに里に下がることが多いのを、ますますこの上なく不憫な方だとおぼし召されて、人の非難に対してもおさし控えあそばすことがおできになれず、後世の語り草にもなつてしまひそうなおん慈しみようである。

上達部かんだらめや、殿上人つえびとなども、人ごとながら目をそらしそらしして、とても眩しいほどの御寵愛である。唐土もろこしでも、このような問題が原因となつて、世の中も乱れ、具合が悪くなつたのだ」と、しだいに世間でも困つたことに、人々の苦情の種となつて、楊貴妃の例までも引き合ひに出されそうになつてゆくので、たいそういたたまれないことが数多くあるが、もつたいない御愛情を唯一の頼みとして、宮仕えなさつてゐる。

父親の大納言は亡くなって、母親の北の方が古い家柄の人の教養ある人で、両親とも揃つていて、今現在の世間の評判が勢い盛んな方々にもたい

してひけをとらず、どのようなことの作法にも対処なさつていたが、これといったしつかりとした後見人が特にないので、改まつたことの間行われるときには、やはり頼りとする人がなく心細い様子である。

#### 「第二段 御子誕生（一歳）」

前世さきのよでも御宿縁が深かつたのであろうか、この世にまたとなく美しい玉のような男の御子みこまでがお生まれになつた。早く早くとじれつたくおぼし召されて、急いで参内さんないさせて御覽あそばすと、たぐい稀な嬰兒のお顔だちである。

第一皇子いちのみこは、右大臣の女御がお生みになつた方なので、後見人がしつかりして、真正銘の皇太子になられる儲君だと、世間では大切にお扱い申し上げるが、この御子の輝く美しさにはお並びようもなかつたので、一通りの大切なお気持ちであつて、この若君の方を、自分の思いのままにおかわいがりあそばされることは際限がない。

最初から女房並みの帝のお側用をお勤めをなさるはずの身分ではなかつた。人々の評判もとても高く、上流人の風格があつたが、むやみにお側近くにお召しあそばされ過ぎた結果、しかるべき管弦の御遊の折々や、どのような催事でも雅趣ある催しがあるたびには、まっさきに参上させなさる。ある時にはお寝過ごしなされて、そのまま伺候させておきななさるなど、むやみに御前から離さずに御待遇あそばされたうちに、自然と身分の低い女房のようにも見えたが、この御子がお生まれになつて後は、たいそう格別にお考えおきあそばされるようになっていたので、東宮坊にも、ひよつとすると、この御子がおなりになるかもしれない」と、第一皇子の女御はお疑いになつていた。誰よりも先に御入内なされて、大切にお考えあそばされることは一通りでなく、皇女たちなどもいらつしやるので、この御方の御諫めだけは、さすがにやはりうるさいことだが無視できないことだと、お思い申し上げあそばされるのであつた。

もつたいない御庇護をお頼り申してはいるものの、軽蔑したり落度を探したりなさる方々は多く、ご自身はか弱く何となく頼りない状態で、なまじ御寵愛を得たばかりにしなくてもよい物思いをなさる。お局は桐壺で

ある。おおぜいのお妃方の前をお素通りあそばされて、そのひつきりなしのお素通りあそばしに、お妃方がお気をもめ尽くしになるのも、なるほどごもつともであると見えた。参上なさるにつけても、あまり度重なる時々には、打橋や、渡殿のあちこちの通路に、けしからぬことをたびたびして、送り迎えの女房の着物の裾が、がまんできないような、とんでもないことがある。またある時には、どうしても通らなければならぬ馬道の戸を鎖して閉じ籠め、こちら側とあちら側とで示し合せて、進むも退くもならないように困らせなさることも多かつた。何かにつけて数知れないほど辛いことばかりが増えていくので、たいそうひどく思い悩んでいるのを、ますますお気の毒におぼし召されて、後涼殿に以前から伺候していらつした更衣の部屋を他に移させなさつて、上局として御下賜あそばす。その方の恨みはなおいつそうに晴らしようがない。

### 「第三段 若宮の御袴着（三歳）」

この御子が三歳におなりの年に、御袴着の儀式を一宮がお召しになつたのに劣らず、内蔵寮や、納殿の御物をふんだんに使つて、大変に盛大におさせあそばす。そのことにつけても、世人の非難ばかりが多かつたが、この御子が成長なさつて行かれるお顔だちやご性質が世間に類なく素晴らしいまでにお見えになるので、お憎みきれになれない。ものごとの情理がお分かりになる方は、「このような方もこの末世にお生まれになるものであつたよ」と、驚きあきれれる思いで目を見張つていらつしやる。

### 「第四段 母御息所の死去」

その年の夏、御息所が、頼りない感じに落ち入つて、退出しようとなさるのを、お暇を少しもお許しあそばさない。ここ数年来、いつもの病状になつていらつしやるので、お見慣れになつて、「このまましばらく様子を見よ」とばかり仰せられるているうちに、日々に重くおなりになつて、わずか五、六日のうちにひどく衰弱したので、母君が涙ながらに奏上して、退

出させ申し上げなさる。このような時にも、あつてはならない失態を演じてはならないと配慮して、御子はお残し申して、人目につかないようにして退出なさる。

決まりがあるので、お気持ちのままにお留めあそばすこともできず、お見送りさえままならない心もとなさを、言いようもなく無念におぼし召される。たいそう照り映えるように美しくかわいらしい人が、ひどく面痩せして、まことにしみじみと物思うことがありながらも、言葉には出して申し上げることもできずに、生死もわからないほどに息も絶えだえでいらつしやるのを御覧になると、過去も未来もお考えあそばされず、すべてのことを泣きながらお約束あそばされるが、お返事を申し上げることもおできになれず、まなざしなどもとてもだるそう、常よりいつそう弱々しくて、意識もないような状態で臥せつていたので、どうしたらよいものかとお惑乱あそばされる。輦車の宣旨などを仰せ出されても、再びお入りあそばしては、どうしてもお許しになることがおできになれない。

「死出の旅路にも、一緒に行こうと、お約束あそばしたのに。いくらなんでも、おいてけぼりには、行かせまい」

と仰せになるのを、女もたいそう悲しいと、お顔を押し上げて、「人の命には限りがあるものと、今、別れ路に立ち、悲しい気持ちでいます。行きたいと思うのは、生きる世界なのでございます。ほんとうにこのように存じましたならば」

と、息も絶えだえに、申し上げたいそうなことはありそうな様子であるが、たいそう苦しげに気力もなさそうなので、このままの状態、最期となつてしまふようなこともお見届けしたいと、お考えあそばされるが、今日始める予定の祈祷類を、しかるべき僧たちの承つておりますのが、今宵から」と言つて、おせき立て申し上げるので、やむを得なくお思いあそばしながら退出させなさる。

お胸がひしと塞がつて、少しもとうとなされず、夜を明かしかねあそばす。勅使が行き来する間もないうちに、しきりに気がかりなお気持ちを漏らしあそばしていらしたところ、夜半少し過ぎたところに、お亡くなりになりました」と言つて泣き騒ぐので、勅使もたいそうがっかりして帰参した。お耳にあそばす御心の転倒、どのような御分別をも失われて、引き

籠もつておいであそばす。

御子は、それでもとても御覧になつていたい、このような折に伺候していらつしやるのは、先例のないことなので、退出させなさうとする。何事があつたのだらうかもお分かりにならず、お仕えする人々が泣き感い、主上も涙が絶えずおこぼれあそばしているのを、変だと押し上げなさるのを、普通の場合でさえ、このような別れの悲しくないことはない次第なのを、まして悲しく何とも言いようがない。

「第五段 故御息所の葬送」

しきたりがあるので、先例の葬法どおりにお言ひ申すのを、母北の方は、同じように死んでしまいたい、泣きこがれなさつて、御葬送の女房の車にお慕い乗りになつて、愛宕という所であつた、その葬儀を執り行つてお慕い乗りに、お着きになつたお気持ち、どんなであつたであらうか、お亡骸を見ては見ては、なおも生きていらつしやるものと思われるのが、たいてい何にもならないので、灰におなりになるのを拝見して、今はもう死んだ人なのだと、きつぱりと思ひ諦めよう、と、分別あるようにおつしやつていたが、車から落ちんばかりにお取り乱しなさるので、やはり思つたとおりだと、女房たちも手をお焼き申す。

内裏からお勅使が参る。従三位の位を追贈なさる旨を、勅使が到着してその宣命を読み上げるのが、悲しいことであつた。せめて女御だけでも呼ばせずに終わつたのが、心残りで無念に思ひ召されたので、せめてもう一段上の位階だけでも、御追贈あそばすのであつた。このことにつけても非難なさる方々が多かつた。人の情理をお分かりになる方は、姿態や容貌などが素晴しかつたことや、氣立てがおだやかで欠点がなく、憎み難い人であつたことなどを、今となつてお思ひ出しになる。見苦しいまでの御寵愛ゆえに、冷たくお妬みなさつたのだが、性格がしみじみと情愛こまやかであつたこと、性質を、主上づきの女房たちも互いに恋ひ惚びあつていた。亡くなつてから人はと言つことは、このような時のことかと思われた。

第一章 父帝悲秋の物語

「第一段 父帝悲しみの日々」

いつのまにか日数は過ぎて、後の法要などの折にも情愛こまやかにお見舞いをお遣わしあそばす。時が過ぎて行くにしたがつて、どうしようもなく悲しく思われなさるので、御方々の夜の御伺候などもすつかりなくお命じにならず、ただ涙に濡れて日をお送りあそばしていらつしやるので、押し上げる人までが露っぽくなる秋である。亡くなつた後まで、人の心を晴々させなかつた御寵愛の方だこと、と、弘徽殿などにおかれては今もなお容赦なくおつしやるのであつた。一の宮を押し上げあそばされるにつけても、若宮の恋しさだけが思ひ出されお思ひ出されて、親しく仕える女房や御乳母などをたびたびお遣わしになつては、ご様子をお尋ねあそばされる。

「第二段 靱負命婦の甲冑」

野分めいて、急に肌寒くなつた夕暮どき、いつもよりもお思ひ出しになることが多くて、靱負命婦という者をお遣わしになる。夕月夜の美しい時刻に出立させなさつて、そのまま物思ひに耽つておいであそばす。このような折には、管弦の御遊などをお催しあそばされたが、とりわけ優れた琴の音を掻き鳴らし、ついちよつと申し上げる言葉も、人とは格別であつた。秀囲気や顔かたちが、面影となつてひたとわが身に添うように思ひ召されるにつけても、闇の中の現実にはやはり及ばないのであつた。

命婦は、あちらに参着して、門を潜り入るなり、しみじみと哀れ深い。未亡人暮らしであるが、娘一人を大切にお世話するために、あれこれと手入れをきちんとして、見苦しくないようにしてお暮らしになつていたが、亡き子を思ふ悲しみに暮れて臥せていらつしやつたうち、雑草も高くなり、野分のためにいつそう荒れたような感じがして、月の光だけが八重葎にも遮られずに差し込んでいた。南面に車を着けて、母君も、すぐにはご挨拶できない。

「今まで生きながらえておりましたのがとても情けないのに、このようなお勅使が草深い邸の露を分けてお訪ね下さるにつけても、とても恥ずかしくて」

と言つて、ほんとうに身を持ちこらえられないくらいにお泣きになる。

『お訪ねいたしたところ、ひとしおお気の毒で、心も魂も消え入るようだと、典侍が奏上なさつたが、物の情趣を理解いたさぬ者でも、なるほどまことに忍びがとうございます』

と言つて、少し気持ちを落ち着かせてから、仰せ言をお伝え申し上げます。

『しばらくの間は夢かとはかり思い辿られずにはいられなかつたが、だんだんと心が静まるにつれてかえつて、覚めるはずもなく堪えがたいのは、どのようにしたらよいものかとも、相談できる相手さえいないので、人目につかないようにして参内なさらぬか。若宮がたいそう気がかりで、湿つばい所でお過ごしになつてゐるのも、おいたわしくお思ひあそばされますから、早く参内なさい』などと、はきはきとは最後まで仰せられず、涙に咽ばされながら、また一方では人々もお気弱なと拝されるだろうと、お憚りあそばされないわけではない御様子がおいたわしくて、最後まで承らないようになつて、退出いたして参りました』

と言つて、お手紙を差し上げる。

「目も見えませんが、このような恐れ多いお言葉を光といたしまして」と言つて、御覧になる。

「時がたてば少しは気持ちの紛れることもあるうかと、心待ちに過す月日がたつにつれて、たいそうがまんがでなくなるのはどうにもならないことである。幼い人をどうしているかと案じながら、一緒にお育てしてない気がかりさよ。今は、やはり故人の形見と思つて、参内なされよ」

などと、心こまやかに書きあそばされていた。

「宮中の秋の花に結んだ露、その上を吹く秋風の音を聞くにつけ、幼子の身が思いやられる」

とあるが、最後まで読みきることがおできになれない。

「長生きが、辛いことだと存じられますうえに、高砂の松がどう思つかさえも、恥ずかしく存じられますので、内裏にお出入りさせていただきますよ。うなことは、さらにとても遠慮いたしたい気持ちでいっぱいです。恐れ多

い仰せ言をたびたび承りながらも、わたし自身はとても思い立つことができません。若宮は、どうお知りになるのか、参内なさることばかりお急ぎになるようなので、ごもつともだと悲しく拝見しておりますなどと、ひそかに存じております由を奏上なさつてください。不吉な身でございます」

とおつしやる。宮はもうお寝みになつていた。

「拝見して、詳しく様子も奏上いたしたいのですが、お待ちあそばされてゐることでしょうし、夜も更けてしまいましょう」と言つて急ぐ。

「子を思う親心の悲しみの堪えがたいその一部だけでも、晴らすほどに申し上げようございますので、個人的にでもゆつくりとお出くださいませ。数年来、おめでたく晴れがましい時にお立ち寄りくださいましたのに、このようなお悔やみのお使いとしてお目にかかるとは、返す返すも情けない運命でございますこと。生まれた時から、心中に期待するところのあつた人で、故大納言が、臨終となるまで、ただ、この人の宮仕えの宿願を、きつと実現させ申しなさい。わたしが亡くなつたからといって、落胆して挫けてはならぬ」と、繰り返して戒めおかれしたので、これといった後見人のない宮仕えは、かえつてしないほうがまだと存じながらも、ただあの遺言に背くまいとばかりに、出仕させましたところ、身に余るほどのお情けが、いろいろともつたないので、人にあるまじき恥を隠し隠ししては、宮仕えをしていられたようでしたが、人の嫉みが深く積もり、心痛むことが多く身に添わつてまいりましたところ、横死のようなありさまで、とうとうこのようなことになつてしまいましたので、かえつて辛いことだと、その恐れ多いお情けを存じ上げております。このような愚痴も理屈では割りきれない親心です」

と、最後まで言えないで涙に咽んでいらつしやるうちに、夜も更けた。

「主上様もご同様で、御自分のお心ながら、強引に周囲の人が目を見張るほど御寵愛なさつたのも、長くは続かない運命だつたからなのだ、今となつてはかえつて辛い人との宿縁だつた。決して少しも人の心を傷つけたようなことはあるまいと思うのに、ただこの人との縁が原因で、たくさんあつてはならない人の恨みをつたあげくには、このように先立たれて、心静めるすべもないところに、ますます体裁悪く愚か者になつてしまつた

のも、前世がどんなであつたのかと知りたい』と何度も仰せられては、い  
つもお涙がちばかりでいらつしやいます」と話しても尽きない。泣く泣く、  
「夜がたいそう更けてしまつたので、今夜のうちには、『報告を奏上しよう』  
と急いで帰参する。」

月は入り方の、空が清く澄みわたつているところに、風がとても涼しく  
なつて、草むらの虫の声々が、哀れを催させ顔なのも、まことに立ち去り  
がたい庭の風情である。

「鈴虫が声をせいいっぱい鳴き震わせても長い秋の夜をとめどもなく流れる  
涙でございますこと」

お車に乗りかねている。

「ただでさえ虫の音のように泣き暮らしてありました荒れ宿に、さらに涙をも  
たらしめます内裏からのお使い人よ、言い訳もつい申し上げてしまひそうで」  
と言わせなさる。趣きのあるような御贈物などあらねばならない時でも  
ないので、ただ亡き更衣のお形見にと、このような入用もあるうかとお残  
しになつた御衣装一揃い、御髪上げの調度のような物をお添えになる。

若い女房たちは、悲しいことは言うまでもない、内裏の生活に朝夕と馴  
れ親しんでいるので、たいそう物足りなく、主上のご様子などをお思い出  
し申し上げると、早く参内なさるようにとお勧め申し上げるが、このよう  
に忌まわしい身が付き随つて参内申すようなのも、まことに世間の聞こえ  
が悪いであろうし、また、しばしも拝さずにいることも気がかりに「お思  
い申し上げなさつて、すらすらとは参内させなさることがおできになれな  
いのであつた。」

### 「第三段 命婦帰参」

命婦は、まだお寝みあそばされなかつたのだわ」と、しみじみと押し上  
げる。御前にある壺前裁がたいそう美しい盛りに咲いているのを御覽あそ  
ばされるようにして、しめやかにおくゆかしい女房ばかり四、五人を伺候  
させなさつて、お話をさせておいであそばすのであつた。最近、毎日御覽  
なさる「長恨歌」の御絵、亭子院がお描きあそばされて、伊勢や貫之に和  
歌を詠ませなさつた、わが国の和歌や唐土の漢詩などを、ひたすらその

方面の内容を、日常の話題になさつていらつしやる。たいそう詳しく里の  
様子をお尋ねあそばす。しみじみとした趣きをひそかに奏上する。お返事  
を御覧になると、

「たいへんに畏れ多いお手紙を頂戴いたしましたしてどうしてよいか分かりませ  
ん。このような仰せ言を拝見いたしましたしても、心の中はまっくら闇に思い  
乱れておりまして。荒い風を防いでいた木が枯れてからは、小萩の身の上  
が気がかりでなりません」

などと言つようにやや不謹慎なのを、気持ち静まらない時だからとお  
見逃しになるのである。決してこう取り乱した姿を見せまいと、お静め  
なさるが、まったく堪えることがおできあそばされず、初めて御覽あそば  
した年月のことまであれこれと思ひ出され、何から何までお思ひ続けられ  
て、片時の間も離れてはいられなかつたのに、よくこうも月日を過せたも  
のだ」と、あきれてお思ひあそばされる。

「故大納言の遺言に背かず、宮仕えの宿願をよく果たしたお礼には、その甲  
斐があつたようにと思ひ続けていたが、詮ないことだ」とふと仰せになつて、  
たいそう気の毒に思ひを馳せられる。そうではあるが、いずれ若宮がご成  
長されたならば、お礼できる機会がきつとある。長生きをして辛抱せよ」  
などと仰せになる。あの贈物を帝のお目に入れる。亡くなつた人の住処  
を訪ね当てたという証拠の釵であつたならば」とお思ひあそばすのも、た  
いして甲斐がない。

「亡き更衣を尋ねて行ける方術士がいてくれればよいのだがな、人づてにて  
も、魂のありかをどこそこと知ることができぬのに」

絵に画いた楊貴妃の容貌は、上手な絵師と言つても、筆には限界があつ  
たのでたいして生気が少ない。大液の芙蓉、未央の柳」の句にも、なるほ  
ど似ていた容貌だが、唐風の装いをした姿は端麗であつたろうが、親わし  
さがあつて愛らしかつたのをお思ひ出しになると、花や鳥の色や音にも喩  
えようがない。朝夕の口癖に、比翼の鳥となり、連理の枝となる」とお  
約束あそばしていたのに、思うようにならなかつた人の運命が、永遠に尽  
きることなく恨めしかった。

風の音や、虫の音を聞くにつけて、何とはなく一途に悲しく思われなさ  
るが、弘徽殿におかれては、久しく上の御局にもお上がりにならず、月が

美しいので、夜が更けるまで管弦の遊びをなさっているそうだ。実に興ざめで、不愉快だ、とお聞きあそばす。最近のご様子を拝する殿上人や女房などは、はらはらする思いで聞いていた。たいへんに気が強くてとげとげしい性質をお持ちの方なので、何とも思いなさらず無視して振る舞っていらつしゃるのである。月も山の端に隠れてしまった。

「雲の上の宮中までも涙に曇って見える秋の月だ。ましてやどうして澄んで見えようか、草深い里で」

お思いやりになりながら、灯火を灯し続けて起きておいであそばす。右近衛府の官人の宿直申しの声が聞こえるのは、丑の刻になったのである。人目をお考えになつて、夜の御殿にお入りあそばしても、うとうととまどろみあそばすことも難しい。朝になつてお起きあそばそうとしても、夜の明けるのも分らないで」とお思い出しになられるにつけても、やはり政治をお執りになることを怠りがちになつてしまひそうである。

お食物などもお召し上がりにならず、朝餉には形だけお箸をおつけになつて、大床子の御膳などは、まったくお心に入らぬかのように手をおつけあそばさないで、お給仕の人たちは皆、おいたわしいご様子を拝見して嘆く。総じて、お側近くお仕えする人たちは、男女とも、たいそう困つたことですね」とお互いに言い合つては溜息をつく。そうなるはずの前世からの宿縁がありあそばしたのでしよう。大勢の人々の非難や嫉妬をもお憚りあそばさず、この方の事に関しては、御分別をお失いあそばされ、今は今で、このように政治をお執りになることもお捨てになつたようになつて行くのは、たいへんに困つたことです」と、唐土の朝廷の例まで引合に出して、ひそひそと嘆息するのであつた。

### 第三章 光る源氏の物語

#### 「第一段 若宮参内（四歳）」

月日がたつて、若宮が参内なさつた。ますますこの世の人とは思われず美しく成長なさつているので、たいへん不吉なまでにお感じになつた。

翌年の春に、東宮坊がお決まりになる折にも、とても第一皇子を超えさせたく思し召されたが、ご後見すべき人もなく、また世間が承知するはずもないことだつたので、かえつて危険であるとお差し控えになつて、顔色にもお出しあそばされずに終わつたので、あれほどおかわいがつていらつしゃつたが、限界があつたのだなあ」と、世間の人々もお噂申し上げ、女御もお心を落ち着けなさつた。

あの祖母北の方は、悲しみを晴らすことなく沈んでいらつしゃつて、せめて死んだ娘のいらつしゃる所にも尋ねて行きたいと願つていらつしゃつた現れか、とうとうお亡くなりになつてしまつたので、またこのことを悲しく思し召されること、この上もない。御子は六歳におなりのお年なので、今度はお分かりになつて、慕つてお泣きになる。長年お親しみ申し上げなさつてきた方を、後に残して先立つ悲しみを、繰り返し繰り返しおつしゃつたのであつた。

#### 「第二段 読書始め（七歳）」

今は内裏にばかりお暮らしになつている。七歳におなりなので、読書始めなどをおさせになつたところ、この世に類を知らないくらい聡明で賢くいらつしゃるので、空恐ろしいまでにお思いあそばされる。

「今はどなたもどなたもお憎みなされまい。母君がいけないということだけでもおかわいがりください」と仰せになつて、弘徽殿などにもお渡りあそばすお供としては、そのまま御簾の内側にお入れ申し上げなされる。恐ろしい武士や、仇敵であつたとしても、見ればつい微笑まずにはいられない様子でいらつしゃるので、放つておくこともおできになれない。姫皇女たちがお二方、この御方にはいらつしゃつたが、お並びになりようもないのであつた。他の御方々もお隠れにならずに、今から優美で立派でいらつしゃるので、たいそう趣きがある一方で気を許すこともできない遊び相手だと、どなたもどなたもお思い申し上げていらつしゃつた。

本格的な御学問はもとよりのこと、琴や笛の才能でも宮中の人々を驚かせ、すべて一つ一つ数え上げていつたら、仰々しく嫌になつてしまつてくらしい、優れた才能のお方なのであつた。

その当時、高麗人が来朝していた中に、優れた人相見がいたのをお聞きあそばして、内裏の内に召し入れることは宇多帝の御遺誡があるので、たいそう人目を忍んで、この御子を鴻臚館にお遣わしになった。後見人としてお仕える右大弁の子供のように思わせてお連れ申し上げると、人相見は目を見張って、何度も首を傾げ不思議がる。

「国の親となつて、帝王の最高の地位につくはずの相をお持ちでいらつしやる方で、そういう人として占うと、国が乱れ民の憂えることが起こるかも知れません。朝廷の重鎮となつて、政治を補佐する人として占うと、またその相ではないようです」と言う。

弁も、たいそう優れた学識人なので、話し合つた内容は、たいへんに興味深いものであつた。漢詩文などを作り交わして、今日明日のうちにも帰国する時に、このようにめつたにない人に対面した喜びを、かえつて悲しい思いがするにちがいないという気持ち趣き深く作つたのに対して、御子もたいそう心を打つ詩句をお作りになつたので、この上なくお褒め申して、素晴らしいいくつもの贈物を差し上げる。朝廷からもたくさん贈物を下賜なさる。

自然と噂が広がつて、お漏らしあそばさないが、春宮の祖父大臣などは、どのようなわけかとお疑いになつていたのであつた。

帝は、畏れ多いことに、倭相をお命じになつて、既にお考えになつていたところなので、今までの若君を親王にもおさせにならなかつたのを、相人はほんとうに優れていた」とお思いになつて、無品の親王で外戚の後見のない状態で彷徨わすまい。わが御代もいつまでも続くか分らないものだから、臣下として朝廷のご後見するのが、将来も頼もしそうに思われることだ」とお決めになつて、ますます諸道の学問を習わせなさる。

才能は格別聡明なので、臣下とするにはたいそう惜しいけれど、親王とおなりになつたら、世間の人から立坊の疑いを持たれるにちがいなさそうにいらつしやるので、宿曜道の優れた人に占わせなさつても、同様に申すので、源氏にして上げるのがよいとお決めになつていた。

年月がたつにつれて、御息所のことをお忘れになる折がない。心慰めることができようか」と、しかるべき婦人方をお召しになるが、せめて準ずる程に思われなさる人さえめつたにいない世の中だ」と、厭わしいばかりに万事が思し召されていたところ、先帝の四の宮で、ご容貌が優れておいでであるという評判が高くいらつしやる方で、母后がまたとなく大切にお世話申されているのを、主上にお仕える典侍は、先帝の御代からの人であちらの宮にも親しく参つて馴染んでいたもので、ご幼少でいらつしやつた時から拝見し、今でもちらつと拝見して、お亡くなりになつた御息所のご容貌に似ていらつしやる方を、三代にわたつて宮仕えいたしてまいりまして、一人も拝見できませんでしたが、後の宮の姫宮さまは、たいそうよく似てご成長あそばしていますわ。めつたにないご器量のお方です」と奏上したところ、ほんとうにか」と、お心が止まつて、丁重に礼を尽くしてお申し込みあそばしたのであつた。

母后は、ああ怖いこと。春宮の女御がたいそう意地が悪くて、桐壺の更衣が、露骨に亡きものにされてしまつた例も不吉で」と、おためらいなさつて、すらすらとご決心もつかなかつたうちに、后もお亡くなりになつてしまつた。

心細い有様でいらつしやるので、ただ、わが姫皇女たちと同列にお思い申そう」と、たいそう丁重に礼を尽くしてお申し上げあそばす。お仕えする女房たちや、御後見人たち、ご兄弟の兵部卿の親王などは、こうして心細くおいでになるよりは、内裏でお暮らしあそばして、きつとお心が慰むように、などとお考えになつて、参内させ申し上げなさつた。

藤壺と申し上げる。なるほど、ご容貌や姿は不思議なまでによく似ていらつしやつた。この方は、ご身分も一段と高いので、そう思つて見るせいで素晴らしくて、お妃方もお貶み申すこともおできになれないので、誰に憚ることなく何も不足ない。あの方は、周囲の人がお許し申さなかつたところに、御寵愛が憎らしいと思われるほど深かつたのである。ご愛情が紛れるというのではないが、自然とお心が移つて行かれて、格段にお慰みになるようなのも、人情の性というものであつた。

源氏の君は、お側をお離れにならないので、誰より頻繁にお渡りあそばす御方は、恥かしがつてばかりいらつしやれない。どの御方々も自分が人より劣っていると思つていらつしやる人があるうか、それぞれにとても素晴らしいが、お年を召しておいでになるのに対して、とても若くかわいらしい様子で、頻りにお姿をお隠しなさるが、自然と漏れ拝見する。

母御息所は、顔かたちすら「記憶でないのを、大変によく似ていらつしやる」と、典侍が申し上げたのを、幼心にとても慕わしいと思ひ申し上げなさつて、いつもお側に参りたく、「親しく拝見したい」と思われなさる。

主上もこの上なくおかわいがりのお一方なので、「お疎みなさいますな。不思議と母君と申してもよいような気持ちがする。失礼だと思ひなさらず、いとおしみなさい。顔だちや、目もとなど、大変によく似ているため、母君のようにお見えになるのも、似つかわしくなくはない」などと、お頼み申し上げなさつて居るので、幼心にも、ちよつとした花や紅葉にことつけても、お気持ちを表し申す。この上なく好意をお寄せ申していらつしやるので、弘徽殿の女御は、またこの宮ともお仲が好ろしくないので、それに加えて、もとの憎しみも返して、不愉快だと思ひになつていた。

世の中にまたとないお方だと拝見なさり、評判高くおいでになる宮の容貌につけても、やはり照り映える美しさは比較できないほど美しく、そのので、世の中の人は、「光る君」とお呼び申し上げる。藤壺もお並びになつて、御寵愛がそれぞれに厚いので、「輝く日の宮」とお呼び申し上げる。

「第六段 源氏元服（十二歳）」

この君の御童姿を、とても変えたくなくお思ひであるが、十二歳で御元服をなさる。御自身お世話を焼かれて、作法どおりの上にさらにできるだけの事をお添えあそばす。

先年の東宮の御元服が、紫宸殿で執り行われた儀式が、いかめしく立派であつた世の評判にひけをおとらせにならない。各所での饗宴などにも、内蔵寮や穀倉院など、規定どおり奉仕するのは、行き届かないことがあつては

いけないと、特別に勅命があつて、善美を尽くしてお勤め申した。

清涼殿の東廂の間に、東向きに椅子を立てて、元服なさる君のお席と加冠役の大臣のお席とが、御前に設けられている。申の時になつて源氏が参上なさる。角髪に結つていらつしやる顔つきや、童顔の色つやは、髪形をお変えになるのは惜しい感じである。大蔵卿が理髪役を奉仕する。たいへん美しい御髪を削ぐ時、いたいたしそうなのを、主上は、「亡き母の御息所が見たならば」と、お思ひ出しになると、涙が抑えがたいのを、思い返してじつとお堪えあそばす。

加冠なさつて、御休息所にお下がりになつて、「ご装束をお召し替えなさつて、東庭に下りて拝舞なさる様子に、一同涙を落とすなさる。帝は帝で、誰にもまして堪えきれなされず、お忘れになつていた折のあつた当時のことを、今思い起こして悲しく思われなさる。たいそう、このように幼い年ごろでは、元服劣りをするのではないかと御心配なさつていたが、素晴らしいかわいらしさも加わつていらつしやつた。

加冠役の大臣が皇女でいらつしやる方との間に儲けた一人娘で大切に育てていらつしやる姫君を、東宮からも御所望があつたのを、「ご躊躇なさることがあつたのは、この君に差し上げようとお考えからなのであつた。帝からの御内意を頂戴させていただいたところ、それでは、元服の後の後見する人がいないようなので、その添い臥しにでも」とお促しあそばされたので、そのようにお考えになつていた。

御休息所に退出なさつて、参会者たちが御酒などを召し上がる時、親王方のお席の末席に源氏はお座りになつた。大臣がそれとなく仄めかし申し上げなさることがあるが、気恥ずかしい年ごろなので、どちらともはつきりお答え申し上げなさらない。

御前から掌侍が宣旨を承つて、大臣に参られるようにとのお召しがあるので、参上なさる。御祿の品物を、主上づきの命婦が取つて賜わる。白い大袿に御衣装一領、例のとおりである。

「ご酒宴の折に、

「幼子の元服の折、末永い仲を そなたの姫との間に結ぶ約束はなさつたか」 お心づかいを示されて、はつとさせなさる。

「元服の折、約束した心も深いものとなりましょう その濃い紫の色さえ変



わらなければ」

と奏上して、長橋から下りて拝舞なさる。

左馬寮の御馬、蔵人所の鷹を留まり木に据えて頂戴なさる。御階のもとに親王方や上達部が立ち並んで、禄をそれぞれの身分に依じて頂戴なさる。その日の御前の折櫃物や、籠物などは、右大弁が仰せを承つて調べさせたのであつた。屯食や禄の唐櫃類など、置き場もないまで、東宮の御元服の時よりも数多く勝つていた。かえつていろいろ制限がなくて盛大であつた。

「第七段 源氏、左大臣家の娘（葵上）と結婚」

その夜、大臣のお邸に源氏の君を退出させなさる。婿取りの作法は世に例がないほど立派におもてなし申し上げなさつた。とても若くおいでなのを、不吉なまでにかわいとお思い申し上げなさつた。女君は少し年長でおいでなのに対して、婿君がたいそう若くいらつしやるので、似つかわしくなく恥ずかしいとお思いでいらつしやる。

この大臣のご信任は厚い上に、母宮が帝と同じ母后のお生まれでいらつしやつたので、どちらから言つても立派な上に、この君までがこのように婿君としてお加わりになつたので、東宮の御祖父で、最後には天下を支配なさるはずの右大臣のご威勢も、敵ともなく圧倒されてしまつた。

ご子息たちが大勢それぞれの夫人方にいらつしやる。宮がお生みの方は、蔵人少将といつてたいそう若く美しい方なので、右大臣が、お問柄はあまりよくないが、他人として放つておくこともおできになれず、大切になさつて四の君に婿取りなさつていた。劣らず大切にお世話なさつていゝのは、両家とも理想的な婿舅の問柄である。

源氏の君は、主上がいつもお召しになつて放さないで、気楽に私邸で過すこともおできになれない。心中では、ひたすら藤壺のご様子を、またといたないとお慕い申し上げて、そのような女性こそ妻にしたいものだ、似た方もいらつしやらないな。大殿の姫君は、たいそう美しく大切にされている方だと思われるけれど、心に染まぬ」というように感じられて、幼心一つに取りつかれて、とても苦しいまでに思つていらつしやるのであつた。

「第八段 源氏、成人の後」

元服なさつてからは、かつてのように御簾の内側にもお入れにならない。管弦の御遊の時々、琴と笛の音に心通わし合い、かすかに漏れるお声を慰めとして、内裏の生活ばかり好ましく思つていらつしやる。五、六日は内裏に伺候なさつて、大殿邸には二、三日程度、途切れがちに退出なさるが、まだ今はお若い年頃であるので、ことさら咎めだてすることなくお許しになつて、婿君として大切にお世話申し上げなさる。

お二方の女房たちは、世間から並々でない人をえりすぐつてお仕えさせなさる。お気に入りそうなお遊びをし、せいじつぱいにお世話していらつしやる。

内裏では、もとの淑景舎をお部屋にあてて、母御息所にお仕えしていた女房を退出して散り散りにさせずにそのままお仕えさせなさる。

実家のお邸は、修理職や内匠寮に宣旨が下つて、またとなく立派にご改造させなさる。もとの木立や、築山の様子、趣きのある所であつたが、池をことさら広く造つて、大騒ぎして立派に造営する。

「このような所に、理想とするような女性を迎えて一緒に暮らしたい」とばかり、嘆かわしくお思い続けていらつしやる。

「光る君という名前は、高麗人がお褒めしてお付けしたものだ」と、言い伝えているとのことである。

